

ヨハネの黙示録が宛てられた小アジアの七つの教会の中で、今日は二つの目の教会である「スミルナ教会」である。この教会に充てられた手紙の内容を理解するために先に当時のこの地域のことを知ることが大切である。

当時も今もスミルナ(現在のトルコ・イズミル)は、エフェソの北に位置する美しく裕福な港町である(現在は、トルコ内の第3番目の都市)。「アジアの誇り」と呼ばれ、ローマ帝国に対する忠誠心が極めて強い都市であった。紀元前195年には既にローマの女神の神殿を建て、紀元26年にはティベリウス帝の神殿を建立し、皇帝礼拝の中心地として栄えた。当時の市民には、年に一度、皇帝の像の前に立ち、「カエサル(皇帝)は主(キュリオス)である」と告白し、香を焚くことが求められた。これを拒否することは、単なる宗教的異端ではなく、「国家への反逆」とみなされた。

また、ローマ帝国の諸都市では、商人や職人は「ギルド(同業組合)」に属して生計を立てていた。ギルドの集まりは必ず異教の神々や皇帝への礼拝・供儀を伴っていた。キリスト者は偶像崇拝を拒むため、このギルドに参加できず、結果として商取引から締め出され、職を失った。スミルナの教会の「貧しさ」は、信仰を貫いた結果として生じた社会的な制裁によるものであった。

このスミルナにはキリスト教の歴史において名高い殉教者の一人がいる。この手紙が書かれた数十年後(紀元155年頃)、スミルナ教会の指導者(監督)であったポリュカルポス(69年頃～155年頃)が殉教している。彼はローマ総督から「キリストをののしれ。そうすれば釈放してやる」と迫られたが、「86年の間、私はあの方に仕えてきたが、あの方は私に何の悪もなさらなかった。どうして、私を救ってくださった私の王を冒瀆できようか」と答え、火あぶりの刑に処された。黙示録の言葉は、まさにこのような死を目前にした信仰者たちを支え続けたのである。

8 節.

「最初の者にして、最後の者である方、一度死んだが、また生きた方が、次のように言われる。」

「最初の者にして、最後の者」。旧約聖書において「主(ヤハウェ)」にのみ帰せられる神の称号(イザヤ 44:6 等)。ローマ皇帝が世界の支配者のように振る舞う現実の中

で、歴史を創造し(最初)、歴史を完成に導く(最後)のはキリストであるという、神の絶対的主権の宣言である。

「一度死んだが、また生きた方」。迫害によって「死」の脅威に直面している教会に対し、イエス・キリストの十字架と復活を提示される。イエス・キリストの復活は単なる過去の奇跡ではなく、「キリストが死に打ち勝たれたゆえに、キリストの体なる教会もまた必ず勝利する」という、確固たる保証となっている。

## 9 節.

「わたしは、あなたの苦難や貧しさを知っている。だが、本当はあなたは豊かなのだ。自分はユダヤ人であると言う者どもが、あなたを非難していることを、わたしは知っている。実は、彼らはユダヤ人ではなく、サタンの集いに属している者どもである。」

「わたしは知っている」。キリストは、教会の苦しみや、社会から剥奪された状況を傍観しているのではなく、すべてを「知って」おられる。全知全能の主が共におられるという事実が、教会の支えである。

「貧しさ(πτωχεία、プトケイア)」と「本当は豊かなのだ」。

ここでの「貧しさ」は、日々の糧にも事欠く絶対的困窮(プトケイア)を指す。しかしキリストは、彼らを「豊かだ」と宣言される。それは、霊的には豊かであるということ。義認(義と認められる。すなわち、罪赦されたこと)、神の子とされた身分、聖霊の内的証しといった「キリストにある霊的祝福」は、国家権力や経済的制裁によって決して奪われることはない。世俗の価値観を根本から覆す、恵みの宣言である。

「サタンの集い(偽のユダヤ人)」当時、ユダヤ教徒はローマから皇帝礼拝を免除されていたが、彼らはキリスト者を「異端」としてローマ当局に密告し、迫害を扇動していた。パウロが語っているように、イエス・キリストを信じるキリスト者、その共同体であるキリスト教会こそが、神の恵みの契約を受け継ぐ「真のイスラエル」である。血肉のユダヤ人であっても、イエス・キリストを拒否し教会を迫害するなら、それは霊的に「サタンの集い」に過ぎないと厳しく指摘されている。

## 10 節.

「見よ、悪魔があなたがたを試みるために、数人を牢に投げ込もうとしている。あなたがたは十日の間、苦難を受けるであろう。死に至るまで忠実であれ。そうすれば、あなたに命の冠を授けよう。」

「十日の間、苦難を受ける」。黙示録において数字は象徴的な意味を持つ。「十日」とは文字通りの日数や永遠ではなく、「神の主権によって明確に制限され、定められた限定的な期間」を意味する。サタンが教会を攻撃する際にも、サタンは神の摂理（歴史を守り導く神の御意志）の中にある。試練は教会を滅ぼすためではなく、信仰を精錬し「試みる(練り清める)」ために、神の許しの中で与えられるもの(ヨブ記など参照)

「死に至るまで忠実であれ」と「命の冠」。これは、人間の努力や精神力による救いを説いているのではない。神様が永遠の御旨によって選び、イエス・キリストが贖われた者は、最後まで信仰を守り抜くことができるよう聖霊によって守られ、導かれる。

「忠実であれ」という命令は、私たちが内側から生かし続ける恵みの御霊の働きによって達成される。そして与えられる「命の冠」は、人間の功績に対する報酬ではなく、徹頭徹尾、イエス・キリストの恩寵による賜物である。

#### 11 節.

「勝利を得る者は、第二の死の害を受けない。」

「第一の死」と「第二の死」。「第一の死」は肉体の死であり、これは命あるすべての被造物、むろん信仰者にも(殉教という形も含めて)等しく訪れる。しかし「第二の死」とは、最後の審判において「火の池」に投げ込まれること、すなわち神からの永遠の断絶と滅びを指す(黙示録 20:14)。

キリスト者は、肉体の死を通過したとしても、第二の死からは完全に免責されている。なぜなら、イエス・キリストが十字架上で「第二の死(神からの見捨てられ)」をすでに身代わりとなって味わい尽くしてくださったからである。この終末的な安全の保障こそが福音の核心である。

日本の教会は歴史的に、戦前の国家神道(神社参拝強要)下において、スミルナ教会と同じような「国家による偶像崇拜の強要と迫害」を経験した。そして現代にあっても、圧倒的な世俗主義や物質主義の社会の中で、キリストの主権を告白する教会は常にマイノリティ(小さな群れ)であり、目に見えない圧力や不利益を被ることがある。

しかし、イエス・キリストは「本当はあなたは豊かなのだ」と語りかけ、「十日の間(限定された期間)」の試練の後に、「命の冠」を用意して待っておられる。私たちは、歴史の初めであり終わりであるキリストの絶対的な主権と摂理に信頼し、慰めをもって信仰の歩みを全うしていくよう召されている。